

## 優秀論文賞を受賞して

授業進行から外れた子どもの発話への教師の対応—  
小学校2年生の算数と国語の斉授業における教室談話の分析—

『教育心理学研究』第53巻第1号)

岸野麻衣

(お茶の水女子大学大学院)



無藤隆

(白梅学園大学)



この度は、日本教育心理学会より優秀論文賞を賜り、誠にありがとうございました。まずは、研究にご協力いただいた学校の先生方・児童のみなさん、研究がより良いものとなるようご助言・励ましをくださった諸先生方・査読者の先生方に厚く御礼申し上げます。

以下に、本研究の背景と概要、その後の展開と今後の抱負について簡単に紹介させていただきます。

## 本研究の背景

小学校低学年の学級を観察すると、子どもが逐一「先生ー！」と声を挙げて、時には授業の中で生じた思いつきを発し、時には自分のできたことに承認を求め、時には周りで起こった喧嘩を報告する、というような様子があちこちで見られます。こうした子どもの声によって、授業は一見すると本筋から逸れたり、中断されたりしていながら、実は教師はしっかりと子どもの声を学習指導にも学級作りにも取り入れて、授業を進めています。

このようなことは、学校現場で日々子どもと過ごしておられる教師の方々にとっては当然のことと思われるかもしれませんが、実践現場でなされている教師の行為の複雑さは実証的には十分検討されていないと考えられました。

## 本研究の概要

本研究では、授業進行から外れた子どもの発話に対して教師がどのように対応するのかを検討しました。小学

校2年生の1学級を対象に、週2回半年間にわたって学級観察を行い、算数と国語の斉授業44時限分の発話記録について分析を行いました。

子どもの発話と教師の対応について、カテゴリー分類を行って両者の関連性を検討し、その結果をもとに発話事例の質的分析を行いました。その結果、次の3点が明らかになりました。①カテゴリー分析によると、「連想的発話」は多くの子どもに見られ、「無関連発話」「拒否」は特定の子どもの多くに見られるという学級の特徴が現れており、教師は発話の種類に応じて対応を使い分けていること、②教師は特に、「割り込み」という形式面で外れた発話には明確な「注意」を行い、内容面で外れた発話のうち、「連想的発話」には「無視」、「無関連発話」「拒否」には「受け入れ」を行っていること、③事例分析によると、これらの対応の使い分けは、授業の構造化、子どもの文脈の許容と活用、学級内の人間関係調整をめぐって、それぞれが必要なレベルに応じて移行しながら行われていることが示されました。

低学年の学級では、授業進行から外れた発話は、学習指導にも授業参加の指導や人間関係にも関わっており、教師は両者を明確に区別せず、揺れ動きながら意思決定していることが示唆されました。

## その後の展開と今後の抱負

本研究の以後も、いくつかの小学校で、継続的な学級観察や教師への聞き取り調査を行っています。

具体的には、中学年の学級でも観察を行い、学級という単位が重視されるようになる段階での教師の指導を検討しています。そこから、低学年から中学年にかけて、授業への参加の仕方や学級での人間関係について学級の一員としての振舞い方がどのように指導されるのかという観点で、いくつかの研究を体系づけようとしています。さらに、指導の担い手である教師の側にも目を向け、教師としての専門性が向上されていく過程についても聞き取り調査を行い、研究を展開しています。

これらの研究と並行して、岸野は学校において心理臨床活動にも携っており、教師の教育実践の特質を踏まえた上で連携していく方法を探索しています。

今回の受賞を励みに、学校現場における実践的意義と教育心理学研究における理論的意義の両面において十分に寄与できる研究を推進していくよう、いっそう努力を重ねていきたいと思っております。